



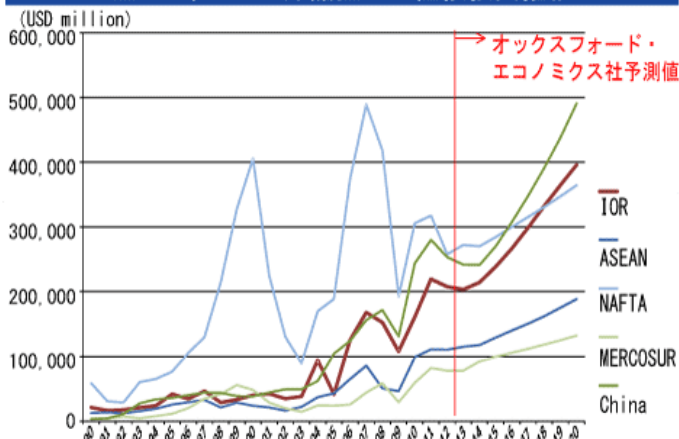
第 3 回：環インド洋諸国への投資と融資スキーム

総合研究部門 時吉康範

1. 環インド洋 (IOR) 諸国への投資の活発化

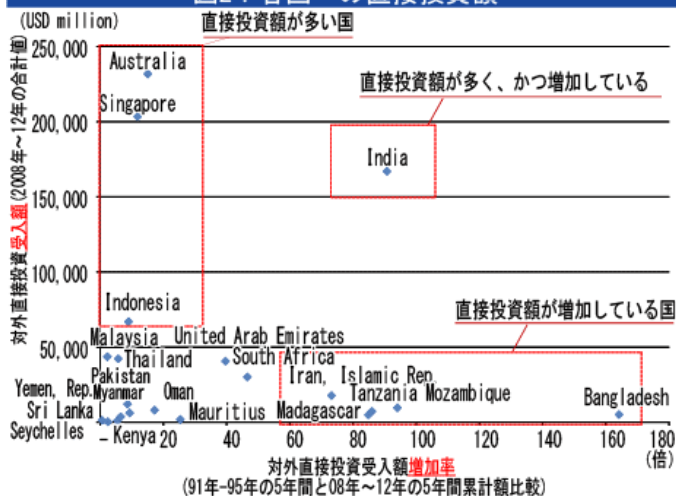
環インド洋諸国全体に対する直接投資額は、2006 年以降増加しており 2012 年に 200,000 百万 USD 規模に達している。今後も増加し続けることが見込まれており、英調査会社オックスフォード・エコノミクスの予測では、2020 年には NAFTA 地域を上回る 400,000 百万 USD 規模に達するとされる。図 1 に主要な経済圏への直接投資額の推移を示す。

図 1：環インド洋諸国への直接投資推移



出所：IMF 統計およびオックスフォード・エコノミクス社資料より日本総研作成

図 2：各国への直接投資額



(91年-95年の5年間で08年-12年の5年間累計額比較)

出所：IMF 統計より日本総研作成

国別では、特にオーストラリア・シンガポール・インドの 3 カ国が直接投資を集めている。図 2 に直接投資額の最

近 5 年間の規模の合計値と約 20 年間の伸びを縦横軸にとり、環インド洋諸国をプロットしたチャートを示す。オーストラリアとシンガポールは、規模が大きい伸びは小さく、バングラデシュ・モザンビーク・タンザニア・マダガスカル・イランなどの国々は、規模は小さいものの急激な伸びを見せている。とりわけバングラデシュの伸びが大きく、91～95 年の直接投資額合計額と 08～12 年の直接投資額合計額を比較すると 160 倍以上となっている。

一方、インドは、伸びが大きく規模も大きい。インドの経済成長に対する諸外国の期待がこうした数字に表れていると言える。

2. 環インド洋連合 (IORA) におけるファンディングスキーム

このように投資を集める環インド洋経済圏であるが、インド洋沿岸 20 カ国からなる環インド洋連合 (IORA: Indian Ocean Rim Association) は、その設立理念である「域内経済協力のためのプロジェクトの組成と実行」を進めるべく、プロジェクトにつながるファンディングスキームを整備しようとしている。

IORA は、「スペシャルファンド」と、「特定プロジェクト・ファンド」という 2 つのファンディングの仕組みを有している。

スペシャルファンドは、2008 年に組成されたファンドである。このファンドは、IORA の重点 6 領域 (「貿易投資促進」「海上安全保障」「海洋経済・海洋資源管理」「観光促進・文化交流」「防災リスクマネジメント」「学術・科学技術振興」) における具体的なプロジェクト、研究、コンファレンス、ワークショップ、エキシビション、フォーラム、研究機関の設立等に利用可能である。利用者は、IORA メンバー国の個人、公的機関もしくは非営利団体となっている。ファンドの組成は、インドが 5 万 USD の資金を出し、その他数カ国が追随する形で始まった。そして、2011 年にインドが 100 万 USD を追加で拠出し、これが現在のファンドの原資となっている。これまでのスペシャルファンドの実績としては、観光促進・文化交流領域で、IORA 域内の観光資源の可能性を探るためのフィージビリティ・スタディがオマーン商工会からの拠出金と IORA スペシャルファンドによって実施されている。また、海洋経済・海洋資源管理領域に関して、オマーンに漁業資源の研究・技術支援組織が設立された。

特定プロジェクト・ファンドは、加盟国自身が域内連携のために推進しようとするプロジェクトに対して、独自に資金を拠出する仕組みである。これまでに特定プロジェクト・ファンドからは、海洋経済・海洋資源管理領域に関して、オマーンの発案による IORA 域内に海運会社を設立するフィージビリティ・スタディや学術・科学技術振興領域に関して、イランの発案による IORA 域内での科学技術移転センターの設立へ資金が拠出されている。

なお、資金拠出の承認は、プロジェクトの規模によって権限が異なっている。20,000USD までのプロジェクトは IORA 事務局の承認、60,000USD までは加盟国の政府高官による検討を経てプロジェクトが承認される。60,000USD 以上のプロジェクトは、加盟国の大臣級会合による検討・承認が必要となる。

このように IORA のファンドによっていくつかのプロジェクトが進行しているものの、IORA のファンドによるプロジェクトの全てが順調というわけではない。たとえば、以下のプロジェクトは中止・中断となっている。

貿易領域にて、スリランカの発案でイラン、ケニア、モリシャス、オマーン、イエメンが賛同した域内特惠貿易制度を検討するプロジェクトは、既存の FTA との整合性や WTO に加盟していないイエメンとの整合性の調整がつかず断念した。

また、海洋領域にて、マレーシアの発案による域内の建設業界のビジネス促進に向けたフレームワークの組成について議論するプロジェクトやインドのイニシアティブによる域内の文化交流を進めるためのコンセプトを立案するプロジェクトは、現在は継続している様子がない(2008 年と 2010 年に会合が実施されている)。

IORA のファンディングの運営は、まだまだ改善と工夫の余地があると考ええる。

3. APEC から見るわが国の IORA ファンドへの取り組み案

既存の経済圏である APEC のファンドを参考に、IORA のファンドの課題を把握し、わが国の取り組みの示唆を得よう。

APEC は、4 つのファンドを有している。「オペレーション・アカウント」「貿易・投資自由化アカウント」「APEC サポートファンド」「セルフ・ファンド」である。

オペレーション・アカウントは、APEC 運営のために利用される資金であり、加盟国の通常拠出金・分担金によってまかなわれる。

貿易・投資自由化アカウントは、貿易・投資自由化のための諸活動のための資金であり、日本および米国が中心となって資金を拠出している。

APEC サポートファンドについては、新興国メンバーのための、キャパシティビルディングに活用される資金である。キャパシティビルディングのテーマは、「安全保障」「ヘルスケア」「貿易」「科学技術」「エネルギー効率化」「途上国の構造改革」の 6 テーマに限定されている。

セルフ・ファンドは、プロジェクトの実施者自身の資金調達等によるプロジェクト組成である。IORA の特定プロジェクト・ファンドと同様の仕組みである。

まず、ファンドの規模の差を見ると、IORA のスペシャルファンドは 100 万 USD であるのに対して、APEC のオペレーション・アカウント、貿易・投資自由化アカウント、APEC サポートファンドの 3 つの合計は 940 万 USD と IORA の 10 倍近くである。IORA ファンドは常に資金不足と言え、資金源の多様化が喫緊の課題となっている。

IORA 事務局によれば、日米と並んで IORA の対話パートナー国である中国が 1000 万 USD の支援を申し入れてきた

ことがあるらしい。この申し入れはアフリカへの進出に積極的な中国が IORA への影響力を強める意図が明確である反面、使途が不明確であったこともあって IORA は断ったようだが、こうした資金が IORA の求心力を高めるために役に立つことは間違いないであろう。

次にファンドの内容、特に APEC サポートファンドに着眼すると、わが国は、エネルギー関連、人材開発関連、情報通信関連、農業技術協力関連、知的財産権関連などのプロジェクトを多く実施している。とりわけ、エネルギー関連・人材育成関連については、APEC プロジェクトとして実施している件数が多い。IORA では、インドが IORA 諸国に対する太陽光発電に関するキャパシティビルディングを提案し、IORA の会合にて受け入れられたところであり、IORA のニーズを見て取ることができる。

アフリカ諸国のニーズに関して、南アフリカのペコ特命全権大使は、2014 年 3 月の経済産業省主催シンポジウムで以下のように述べている。

「(アフリカは)7 つの西インド洋の国々があるが、環インド洋という地域を共有していながら、その恩恵をまだ受けきっていない。インド洋から得られるベネフィットの半分は、環インド洋以外の国々が受けている。環インド洋の国々は、遠くの国よりももっと恩恵を受けることができるはずである」

「対話パートナー国である日本の役割という観点では、貿易・投資の視点から、日本の民間企業がアフリカの産業に協力をしていくことではないかと考えている。サービスの分野でもパートナーシップを深めていくことができるだろう」

「たくさんの協力が、日本の学术界と環インド洋の学术界で可能となるだろう」

「キャパシティビルディングでの協力も望まれる。投資を増やしていくことも重要である。日本は、マーケットのポテンシャルを開拓するうえで、大きな役割を果たすだろう」

このような発言からも、わが国が得意とするキャパシティビルディングを目的とした投資を手段として、民間企業が市場開拓を進めることは IORA でも歓迎されるものと考えられる。

<プロフィール>



時吉 康範
(ときよし やすのり)
ディレクター/プリンシパル

早稲田大学政経学部政治学科卒業、ニューヨーク大学経営大学院卒業。化学業界を経て、日本総研に入社。イノベーション・技術経営戦略および環インド洋・環ベンガル湾諸国への日系企業の事業創造戦略などに従事。